校務委員会の成立

敗戦によって、それまでわが国を支配した旧体制がくずれ去ってのち、占領軍の管理政策という外部的な圧力があったにしろ、一時の虚脱と混迷からたち上ろうとする革新的風潮が、目を追うて高まった。本校内部における学校運営の民主化をはかろうとする動きもそうした国内情勢の反映であるとともに、戦災で校舎を失ったわれわれが、いかにして日々の教育活動を推し進めてゆくか、またいかにして分散の悲境にある学校の運営を一本化するかという、主体的意欲から発したものであった。

そうした機運の高まった昭和二十年度の第三学期末、職員会議の席上討論の結果、学校運営民主化の方策を立案すべき委員を投票によって選出した。すなわち、江畑、福田、本谷、岡本、乾の五名でこれら起草委員は直ちに起案を完了し、職員会議に提示してその承認を求めた。それは「校務運営要綱草案」と名づけられ、職員会議校務委員会、学校長、会計、興学会への職員参与、付則の各章、合わせて四十七条より成っているが、その大要はそれに付けられた「まえがき」につきている。

思フニ自覚ト責任ニ基ヅク個人ノ自主自律ト広ク衆知ヲアツムル合議公論ノ体制トハアラユル組織運営ノ基盤タルベキモノナリコレニカンガミテ新ニ構想ヲメグラシココニ校務運営要綱草案ヲ作成セリ構想ノ主眼タルベキモノ次ノ如シ

一、職員会議ノ性格ノ明朗化
一、公選ニヨル校務委員会ノ発足
一、学校運営ノ民主的強化
一、会計ノ公開

コレナリモトヨリコレハコレ草々タル未定稿ニシテ幾多推敲ノ余地アルベキハ勿論今後時運ノ進展ニヨリ更ニ充実セル改革ヲ期スベキモノナルハイフヲ待タズシカレドモコノ大綱ニノツトリワレラ自覚自励綱紀ノ振粛ト団結ノ強化ヲハカラン更ニハワレラ自ラノ手ニヨル消費組合ヲ組織シテ生活ノ不安ヲ打開シ本校独自ノ立場ニヨル教員組合ヲ結成シテワレラノ社会的政治的地位ノ向上ヲ実現センカクテワレラ理想ノ学園ヲ玉成セバワレラノ掲グル炬火ハ毀々トシテ前進シ全日本教育界発展ノ先駆タルヲ得ベシ

昭和二十一年三月二十二日

これによって昭和二十一年度の校務委員（定員六名）を選出したが、その第二十五条B項によって、当時の河野教頭は自動的に校務主任となり、他の五名は前記の起草委員がそのまま選出された。ところが、河野教頭は年度末の人事異動によって兵庫県立伊丹高等女学校長に栄転し、校務委員会では江畑教諭を校務主任に推挙、四月十日の新学年準備職員会議で学校長よりその旨発表され、またそれに伴う校務委員補欠選挙の結果、福永教諭が選出された。

かくして発足した校務委員会も、同年八月十二日、ある事態のため、意見不一致を理由として総辞職のやむなきにいたり、学校長の意志によって、校務主任、校務委員を一時欠員とする非常措置がとられた。

その後、年度末にいたり、新たに発足する新制中学校への人事異

動を機として、三月二十日の臨時職員会議で教務主任推薦投票の結果、福田教諭が選出され、また学校長の発議により、さきの校務委員会に代るべき機関として六名の「企画委員」を選挙した結果、神保、本谷、井上良、乾、岡本、岸の各教諭が選出された。

企画委員の定員は、教員数の増加に伴い、昭和二十六年度から二名増員して八名となった。また企画委員会は、はじめさきの校務運営要綱のような明文化されたものを持たれなかったが、（のち昭和二十六年三月の諸規定の中の、校務運営規定、企画委員会及び同委員選挙規定にはじめて成文化）二十二年以来現在まで九期に及び、学校長の諮問機関として校務の企画、統制、運営に任じている。

芦中教員組合の結成

昭和二十一年四月、校務委員会の成立後、校務運営要綱草案の前文にうたわれた教員組合の結成準備が、岡本教諭によって進められていたが、五月三日の職員会議席上、同教諭より規約原案の説明があって、一同その趣旨に賛成、五月六日の本校創立記念日（前日のところ、雨天のため一日順延）の職員祝賀懇親会（本山第一校内の本校職員室）で、投票によらずして、話合いで書記長には江畑校務主任を、執行委員に浅生、伊藤、岡本、林、本谷の五名を決定した。組合員は学校長、教諭、事務職員合せて二十八名であった。

五月十七日、江畑書記長ほか五名の執行委員は、兵庫県庁に岸田知事を訪問し、

一、本年三月末の県立中等学校長異動の基準について
二、都道府県教員適格審査委員会の構成について
三、改正官吏制度について
四、教員の生活安定策について
五、本校々舎復興の具体策について

約一時間にわたって対談し、さらに二十日には、兵庫県庁に工藤教育民生部長を訪問、約一時間半にわたって、主として教員適格審査委員会の構成について面談した。

六月二日、本山第一校内の本校教室に、阪神地区中等学校有志が参会して阪神地区中等学校教員組合結成の声明書を発したが、これはそのものとしての活動よりも、県下未組織の中等学校の組織化を促すためのものであった。

その後、校務委員会の棚上げとともに、この方面の活動も一時停滞したが、当時中央においては日教労が最も活動的であり、それが中核となって全教組に発展し、秋から年末にかけて最低生活権獲得闘争を盛り上げつつあった。この運動をめぐって全官公労組を一丸とする翌年の二・一ストへの高まりの過程において、全教組（後に全教協）と教全連の対立が激化したが、本校は中立として中央両派のいずれにも同調せず、二・一ストを静観し、もっぱら県下中等学校との連携の機会を求めていた。二十二年二月、二・一ストをやまとする中央情勢に動かされて神戸市立中等学校教員組合、阪神地区中等学校教員組合、新に生まれた神戸市内県立中等学校教員組合の三者を中心として、兵庫県中等学校教員組合連盟の結成に成功し、委員長には県立第一高女教授黒橋粂一氏が選出された。

昭和二十二年四月、留任した中教連の黒橋委員長の下に、本谷教諭が副委員長に選出されたが、中央においては二・一スト禁圧後の情勢に促されて、全教協、教全連の間に急速に合同の機運が盛り上

り、それにつれて全国の教職員の戦線統一がようやく日程に上りつつあった。本県においても県単（全教協）神戸市教組（教全連）県中教連（中立）の既成組織に、その四月発足したばかりの新制中学を加え、新たな全国組織の下部組織となるべき県内の組織の一本化の交渉が進められた。

六月八日、奈良県橿原において、各都道府県単位の教員組合を下部組織とする連合体として日本教職員組合（日教組）が結成され、ここに全国五十万の教職員の大同団結がはじめて成った。県内においても前記の四者の代表をもって構成する合同準備委員会は、さらに水頃勘次（県単）東悦次（神戸教組）杢谷（県中教連）中井哲彌（新制中学）の四名の小委員会を設けて規約の起草に当り、七月十日、明石女子師範付属小学校講堂において兵教組が結成された。かくして芦屋支部の結成とともに。前年五月，単独の組合として発足した本校教組は、その一分会となって全国組織の中に包含され、村上邦雄支部長（精道小学校）のもとに杢谷副支部長、岡本書記長を送って、支部の強化に努力した。

一方、兵教組結成後、直ちに交渉委員をあげて（芦屋市支部から村上、杢谷の二名）県知事との団体協約の交渉に入ったが、ほぼ三箇月にわたる交渉の結果、九章並びに付則、合せて三十四条に及ぶ労働協約書が、昭和二十二年十一月八日、兵庫県知事岸田幸雄と兵教組中央執行委員長常深任との間で締結調印された。

やがて村上支部長の辞任により，杢谷副支部長の支部長就任を見たが、また一方その年末から一、八〇〇円ベース改訂闘争に入り、兵教組本部に闘争委員会が設置せられて、岡本教諭はその書記長に選任され、昭和二十三年度の役員改選に際して、常深委員長の後をうけて兵教組第二代目の執行委員長に就任した。

一、八〇〇円ベース改訂闘争は、政府の二，六〇〇円ベースの決定により、その給与切換をいかに有利に獲得するかに交渉の焦点がしぼられたが、大阪府並みの条件を堅持する兵教組は地労委に提訴ついに五月二十一日の非常事態を現出した。

やがてマックアーサー指令にもとづいて、公務員法が改められ、団結権のみを残して，罷業権、団体交渉権が否定され、さきに妥結した労働協約も、厚生関係の条項のみを残して自動的に廃棄された。

いま、われわれは、兵教組と友好的提携をなしつつも、組織としては一応分離した兵庫県高等学校教員組合（兵高教組）阪神支部の一翼として、兵教組とともに日教組の傘下にある。

アンケート

一　最も印象深かつたこと
二　芦高の将来に対する期待

旧職員　岡本　仁（兵庫県教育委員）

一　昭和二十一年三月に「校務運営要綱（校務委員会規約）」が成立をみたこと。日本国憲法、教育基本法に半年から一カ年先がけて出来たもので、日本教育史上、特筆大書すべきことである。生徒諸君には知られていないことであろうと思うが、本当に意義深い誇るべき職員会議の決定であったと思う。

二　生徒自治会の文化的教養のゆたかな民主的発展。換言すれば人間探究の若々しい息吹きがいつもただよっていること。

校歌の制定

本校に校歌がほしいとの声は、ずいぶん早くからあったが、その制定の直接の動機となったのは、昭和二十一年三月十六日に行われた第一回校内弁論大会（本山第一校講堂）での二年生上田雄（現在芦屋市立山手中学校教諭）の「校歌を作ろう」と題する演説であった。

発足したばかりの校務委員会でも、校歌制定の方針を定め、四月十日の職員会議で校歌・校友会探の歌詞の募集を決定し、翌十一日の始業式でその旨を全生徒に発表した。

応募資格　本校職員と生徒・卒業生であること

締切期日　四月末日

発　表　でき得れば五月五日本校創立記念式で歌詞を発表

というのがその要綱であった。

ところが応募状況によって、五月三日の職員会議で、締切を一週間延期することとし，なおその審査は国語科職員に一任された。

五月十三日，国語科（伊藤、杢谷、金坂、富永、浅生の各教諭）で、校歌選定委員会をひらき、応募作品二十七編（職員五、生徒二〇、卒業生二）のなかから、第一次選抜の結果として十編を選抜した。

五月十八日の職員会議で、さきに選抜された十編（かりにA案からJ案とする）を校歌選定資料として公表し、そのなかから、校歌一、校友会歌一を決定する方法が次のようにきめられた。

決定方法は投票による。

投票は職員各一票。生徒は三年以上の各組一票ずつ組の代表者が当該学級の総意にもとづいて投票すること。

投票日は五月二十四日とする。

五月二十四日、本山第一校の本校職員室で校歌・校友会歌の決定投票を行った。職員の出席者二十名。生徒代表三年以上各組一名で九名。校歌は一回の投票で、本校教諭浅生孝之助、岡本仁（現在、兵庫県教育委員）の共同作詞になるA案が十四票、B・E・H案それぞれ五票で、A案と決定された。次いで校友会歌では、B案とI案の得票数が接近したため、さらにこの二案について決選投票の結果、本校教諭伊藤常吉（現在、神戸市立花園中学校長）の作であるB案に決定し、両案とも作曲は本校教諭池尻景順（現在、西宮市立今津中学校教諭）に依嘱された。

かくして校歌の作曲がまず完成し、七月十五日、本山第二校講堂において、校歌制定式ならびに記念音楽会がはなばなしく催された。当日のプログラムを次のページに掲げよう。

校歌の作曲

池尻景順

◇

最初あの歌詞を渡された時「春曙の打出浜」の一句を読んで何ともいえない快い感じを受けたことをおぼえている。しかして味わえば味わうほどこの一句のよさがわかってきたのである。作詞者にはそこまでの用意があったのかなかったのかはいざ知らずだが、この最初の一句こそ、われらが日々接している若人達の姿そのものではないか、何というほのぼのとした、また、前途洋々たるを思わせる快い一句かな、と思ったことである。この感動を曲の上に持って行

きたい、この心持を盛り上げなければ生きた曲にならない、とまず肝に銘じたことであった。

◇

実をいえば、池尻はそれまでに相当数に上る校歌とか団歌とかの作曲をやった。が、池尻の曲には何となく一種の陰影といったような暗さがある、と人からもいわれ、自覚もしていた。しかしこの校歌に限り、そうした暗さがあってはならない、できるだけ明朗なものにしたい、そうしなければならない、と思った。

しかし単に明朗のみを目指して、校歌としての重みといったものを失ってもならない。また、曲自体の形式方面の美というものも盛り上げたい、と、ざっとこういった態度でのぞむことにしたのであった。

で、最初ので出し「奉曙の打出浜」をうたい出すのにかなりの日数を費したと思う。これが出来さえすれば、後に続くものは難なく出来てしまうのである。来る日も来る日も「奉曙の打出浜」が心中を往来していた。現地をうろついて気分味得につとめたりした。

かくて最後に唱い出したものが、ごらんの通りのものとなった次第である。

◇

芦高が、奉の選抜野球に出陣して一勝する毎に演奏されるのを放送で聴いた時、多大の感銘を受けたことである。

この時は、多数の校友諸君はもとより、学校関係者或は広く芦屋市民の方々も、応援、観戦に詰めかけて居られたことであろう。実際にその場に居て、揚揚せられる校旗を仰ぎつつその演奏を聴かれた時のその感激は、果してどんなものであろう、とつくづく思って見たことであった。

◇

「その学校の校歌は、対外試合毎に一歩前進する」といえるのではなかろうか。試合に勝てば勝ったで、敗ければ敗けたで、それぞれの感慨をこめて唱われる校歌では

Ⅰ 校歌制定式

1 学校長式辞
2 作詞者あいさつ
3 作曲者あいさつ
4 記念品贈呈
5 一同唱和

Ⅱ 記念音楽会

第一部　辻 久子嬢　バイオリン独奏

Ⅰ シャコンヌ……ビタリー
Ⅱ イ G線上のアリア……バッハ
　ロ 無窮動……ビタリー
　ハ 冥想曲（タイスより）……マスネー
　ニ 支那の太鼓……クライスラー
Ⅲ チゴイネルワイゼン……サラサーテ
　ピアノ伴奏　松井重博氏

第二部

Ⅰ ハーモニカ独奏……藤井 治助
Ⅱ 合唱　オールド・ブラック・ジョー
　指揮　富岡 光男
Ⅲ 斉唱　谷間の灯……富永、明石、富岡
Ⅳ 四重唱……卒業生有志
　イ 野ばら　ロ 白百合
　ハ 希望の島　ニ 舟人の欲

ある。

あるいは歓喜の涙で、あるいは感謝感激の念をもこめて、時には悲涙をしのばせて、敗れて悔なき気持をこめて、またそこには更に捲土重来の意気をもこめて、その刹那、人無く我無くただあるものは青春純情の熱血のみ、という境地……。

アンケート

一　最も印象深かつたこと

旧職員　坂田 健二（芦屋市立山手中学校教諭）

一　戦火のため最初の校舎を借しくも失い、流浪苦節数年を経て現在の校舎に落ちつかんとする前、待望の校歌の制定を見、その発表会の日、「東の空にあかねさし……」と第一声を聞いた時。

二　名門芦屋と短時日にも拘らず、全国に謳われるようになったのは、正に天の利、地の利を得た幸運児というべきである。今後戦前にもまして不死鳥の如く舞い上り、覇気と意気に燃えた校風の確立を切願します。

富岡 光男（第三回生）

一　文化祭の歌（岡本仁先生作詩）を第一回文化祭にはじめて小生発表させてもらったこと。

二　ゆめゆめ暴力教室にならぬよう。

旧職員　林 翁介（県立兵庫高校教諭）

一　思い起せば九年前になりますが戦災校舎中時代当時、校舎は本山第一小学校を借り、第二小学校にも分教室を借り、分散授業で化学の実験室もなく、どうすれば化学を理解させることが出来るだろうかと苦心したこと。また試験用紙がなく粉石鹸の空袋の利用で試験をしたこと。

二　創立十五周年全く御同慶至極です。卒業生諸君も大学を出て実社会に活躍しておられる人も相当あるはずなれば、一つ先輩格の有志発表で後輩推進の道を開く組織的な○○会でも構成されては如何。

二　芦高の将来に対する期待

旧職員　平子 道一（県立東神戸高校教諭）

一　昭和二十一年五月、当時失職中の私が芦高の前身芦中へ勤めることになり、本山第二小学校の仮校舎の講堂で就任の挨拶に科学精神の話をした喜びの大きかったことに比較して、最後の職場とたのんだ芦高を去ることになり、昭和二十四年四月現校舎の講堂でお別れの言葉として、先生と生徒は友達でなければならないというような私の日頃のイデオロギーの一端を叫んだ時の悲しい印象は何といっても最も深いものです。しかし今日芦高の思い出はみな楽しいものです。当時芦高の諸君は今どうしておられるのか。時々当時を思い出して下さい。そしていつまでも若く元気で生きて下さい。

二　私の知る限りの芦高は何か明るい、自由と情熱に満ちた芦中、芦高でした。野球で一躍天下の芦高となりましたが、これもやはり芦高健児の自由と情熱から育てられた成果であると信じます。歴史は浅いが、歴史に煩わされない幸があります。芦高こそ民主日本のシンボルであってほしいと思います。歴史に煩わされないこのはつらつたる伝統をいつまでも持ち続けてほしいと思います。

校友会各部の胎動

敗戦によって焦土は容易に復興せず、本校の仮校舎も本山村の第一校、第二校に分散してようやく授業を再開したばかりであったけれども、一日も早く戦時色をぬぐい去って、新しい教育活動へふみ出そうとする動きは、戦時中の報国団に代わる校友会の復活となってあらわれた。それは敗戦の年の秋ごろ職員会議でいち早く話題となったが、その時、従来教師がリードしがちであった行き方を改めて学校としては文化部、運動部という大きな枠だけを明示して、その範囲内で生徒の同好者が相集ってどんな種目のグループを生み出すかは、一応生徒自体の自主的な組織活動にまかせてみようとの基本方針が定められた。これによって早速活動をはじめたのが、当時四年生であった橋本修三を中心とする野球部で、年末から昭和二十一年はじめにかけて、新学年度の雄飛にそなえて着々チームを整備しつつあった。本格的練習場を持たぬハンディキャップも、かれらが兵庫師範学校（現在の神戸大学教育学部）のグランドまで登るという真剣さによって克服せられた。しかしながら学校のこの新方針に対して生徒自体多少とまどい気味であり、加うるに資材不足などの悪条件のため、昭和二十年度中は他に見るべき動きもなく、ようやく年度末になって第一回校内弁論大会が逆に教師側の提案によって（岡本仁教諭）開催されたくらいで、この年度を終ったのであった。

昭和二十一年度を迎えて、校務委員会が成立し、校内に一種の活気があふれるとともに、校友会の組織への関心もようやく本腰となり、四月十二日放課後、校友会組織準備委員会が持たれた。出席者は、校務委員会、三年以上各組の正副組長、すでに活動を始めた部または会の代表者、その他職員有志者であったが、参会した部は、野球部以下六つを数えるにすぎなかった。席上、校友会々則草案（本谷教諭）の説明があり、各部の代表者の質問などあったが、大体趣旨に異論なく、細部は他日にゆずり、会費の審議に入り、年額三十円（三回分納）と月額三円の二案を当日の話合いの結論として、三年以上各組の意見を聞き、組長がまとめて次回の組織準備委員会に提出することに決定した。なお、五年佐藤長光から、もっと一般生徒の関心を高めるよう啓蒙の必要あることが力説され、明十三日の四年以下の第一学期正副組長任命式のあと、学校側の意図を広く生徒に呼びかけることとなった。

四月十六日の校友会組織準備委員会で、前会の二案のうち、大多数の支持を得た月額三円が決定された。

かくして次々に生まれてきた各部は、その代表者として幹事一名を選任し、なお職員中から顧問を依嘱する。文化部、運動部の幹事会はその中からそれぞれ一名の文化部、運動部生徒理事を選出する。職員側でも顧問の中から文化部、運動部職員理事一名ずつを選出し、理事長（校務主任）とともに生徒理事二名、職員理事二名が総務部を構成して、文化、運動両部の連絡統制に当る。会長には学校長を推戴する。――というのが会則草案の骨子であった。この会則草案は結局成文化せられず、昭和二十四年度に自治会の規約改正によって、それまでの校友会と自治会が一本化せられた新規約が成立するまで、不文律として運営せられた。最初の文化部生徒理事に川越隆（弁論部）、運動部生徒理事に古塚豊一（水泳部）が選出さ

れ、職員理事には本谷教諭（文化部）岸教諭（運動部）が選任されて、五月はじめ、総務部は各部予算原案を作成し、五月十日には、顧問同席して、最初の予算討議の幹事会（いわゆる予算会議）が開かれた。

またこの頃、三年の馬淵良俊を中心に読書クラブというものが生まれ、本山第一校の本校職員室前の廊下に「校友新聞」と題する壁新聞をはり出した。細字のペン書きでもって普通の新聞を模したその紙面が人々を驚嘆させた。それが現在の「芦高新聞」の発祥であり、読書クラブは後に図書部に発展するのである。

六月十日、校友会新発足記念大会が本山第一校講堂で開かれ、その第三部で、校友会各部の代表者がその内容紹介の熱弁をふるったが、それは次の各部である。

野球部　陸上競技部　機械体操部　排球部　山岳部　水泳部（運動部）

生物研究部　文芸部　英語会話部　図書クラブ　科学研究部　数学研究部　音楽部　古典研究部（文化部）

なお、文化部の科学研究部のなかで、鉄道研究会もすでに当時活動を開始しており、かくして校友会の形態は一応整った。

この夏、戦後最初の全国中等学校優勝野球大会に、グランドを持たないわが野球部が兵庫県予選に優勝して、西宮原頭に進出した驚異的活躍については、次の項で述べるが、昭和二十一年度中に運動部ではさらに蹴球部、庭球部が生まれ、文化部では写真部、編集部が生まれ、特に編集部では校友会誌の発行を目ざして、すでに誌名「芦笛」（五年古林久和の命名による）も決定しながら、実現にいたらなかった。

しかしながら、昭和二十一年度において特筆すべきは、運動会の復活と芦中模擬国会及び第一回文化祭の開催である。運動会は戦争中一度（昭和十七年）西宮球技場で行われたもの以来、第二回目で、十一月三日芦屋山手校でひらかれた。続いて六日には本山第一校講堂で、芦中模擬国会が行われた。この催しはこの回きりで後を断っているが、ちょうど新憲法の制定にちなんで、九月中から弁論部で構想を練っていたもので、岡本弁論部顧問を国会議長とし、内閣総理大臣阪部校長以下各先生のつとめる大臣に対して、生徒側は代議員として自治党（十一名）民主党（十六名）建設党（十九名）に分れて相対した。議事日程の主なものを拾うと

内閣総理大臣施政演説（内閣書記官長本谷教諭代理）
文部大臣施政演説（井上良教諭）
総理大臣施政演説への各党代表質問演説
文部大臣施政演説への各党代表質問演説
戦災学校復旧国家負担法案上程（建設党提出）満場一致可決
男子中等学校に女教師採用の決議案上程（自治党提出）否決
校友会振興法案上程（民主党提出）可決
自治党より「中等学校義務教育費法案」上程の緊急動議不成立

第一回文化祭は本山第一校で十一月二十三・二十四両日にわたって、講堂では公演、教室では展覧が行われた。展覧に参加した部は写真、絵画、生物、科学、鉄道の各部で、また公演のプログラムは次のようであった。

開会のことば	会長（学校長）	
文化祭序曲（文化祭の歌）	グリー・クラブ	
弁論	弁論部	
独唱四曲	グリー・クラブ	
スピーチ	岸田卓彌（E・S・S）	
朗読安寿と厨子王	文芸部	
文芸閑談	冨永教諭	
合唱三曲	音楽部	
シュプレッヒコール日本国憲法	弁論部	
なつかしの旋律集	グリー・クラブ	
英語対話劇ゴタムの知恵者	E・S・S	
合唱とピアノ独奏	音楽部	
脚本朗読海彦山彦	文芸部	
フィナーレ	グリー・クラブ	
校歌四部合唱	音楽部	
閉会のことば	文化部職員理事	

「文化祭の歌」は岡本教諭作詞、池尻教諭作曲のもので、現在「記念祭歌」として生徒に愛好されている。

昭和二十二年度に入って、運動部では軟式野球部、卓球部、ラグビー部が加わり、文化部では美術部、社会科学研究部が加わったが、また機械体操部、数学研究部（後に復活）、古典研究部のごとく消滅したところもあり、それぞれ多少の消長を示じつつも、十月に単一校舎獲得後は、各部の活動も本格的となり、ガリ版の校友新聞のあとを受けて十五号からは活字印刷の「芦中新聞」となり、校友へのサービス機関として異色ある理髪部が生まれ、この年度のおわりの三月には、一年間雌伏してその間総務部直属に置き変えられた編集部は「芦笛」創刊号を出し、はじめて総合的な校友会誌の発行を見た。

なお、この年度の大きな行事として、六月に行われた第一回クラス対抗討論会がある。形式は、朝日式で、四、五年を上級組、二、三年を下級組として、七日からそれぞれトーナメント式に試合を進め、十四日には上級組、下級組の優勝戦を芦屋山手校の講堂で行った。その論題には当時の芦中生の思索の方向がうかがわれておもしろい。

○男女中学生の交際は是か否か。
○男子中学校に女教師採用は是か否か。
○中学生の討論会は是か否か。
○学生に対する政治教育は是か否か。
○学生に対する宗教教育は是か否か。
○従来の試験制度は是か否か。
○高校生のバンカラは是か否か。
○ローマ字の国字採用は是か否か。
○宗教と科学は両立しうるや否や。
○道徳は時代によって変るか否か。
○戦争は地球上より抹殺しうるや否や。

昭和二十三年は芦屋高校として新発足の年である。運動部では硬式庭球、籠球が生まれ、文化部では演劇部が発足した。また従来の

図書クラブは、総務部の下にあって図書部と編集部の一部に発展的に解体した。昭和二十一年四月の月額三円の会費は、迫りくるインフレの波に押されて、たちまちその年度中に六円に値上げされ、二十二年度には一躍して月額二十円に、その後も値上げが続けられたが、校友会としては最後の年の各部予算を次に掲げて、現状との比較の資料にしよう。

総務部	130,000	社会科学	5,000
図書		演劇	10,000
編集		運動部	210,000
理髪		野球	76,200
その他		軟式野球	16,000
文化部	80,000	硬式庭球	6,000
生物	10,000	軟式庭球	15,000
文芸	7,500	蹴球	30,000
E・S・S	7,000	ラグビー	15,000
音楽	8,000	水泳	9,000
弁論	6,000	陸上競技	9,000
科学	7,000	山岳	7,400
鉄道	6,000	排球	12,000
写真	5,000	卓球	8,400
美術	8,500	籠球	6,000

校友会の胎動からその発展期へ、それは常に生徒自体の活発な組織活動によるものであっただけに、各部は機会あるごとに部員募集を呼びかけ、その組織の拡大をはかることに懸命であった。そういう校内風景を巧みに諷した「ある日の告知板から」（各部部員募集大童）と題する一文を、「芦高新聞」十八号から引用して、この項を結ぼう。

（演劇部員大募集）
「彫刻は動かず、絵画は立体にあらず、小説は声を発せず、音楽は見えず、しかして演劇は五感を網羅する総合芸術なり、芸術を愛好する士よ来たれ」
（弁論部）
「古人は言はずや、『雄弁は成功の秘決なり』と、これ永遠不滅の真理なり、聞け、若人の壇上の獅子吼を、時代は弁論を要求する、あゝ勇なる哉！親愛なる芦高健児諸君よ、成功を欲する者は、わが芦高弁論部の旗の下に来たり参ぜよ！」
（ラグビー部）
「35—0で三田高校に大勝、部員募集、希望者は部員まで」
（籠球部員募集）
「本日例会あり、希望者は来たれ」
（E・S・S）
「例会あり、会員並びに希望者は二ノ二に集まれ」
エヘン、各部とも、なかなか活発に、やっちょられますな、まづ演劇部にもの申す、彫刻に通ふ生命の躍動、平面に求むる無限の立体感、はたまた小説、音楽の与ふる幻覚の陶酔境こそ、げに芸術の微妙にして、深遠なる所以と覚えしは僻目か、いかに！次に弁論部にもの申す、古人は言へり「雄弁は銀、しかして沈黙は金なり」といかに！しかれども、われ、かの宣伝ビラに弁論の特権を見のがさず、すなわち、秘訣の決なる誤字、異綴同音なる故、弁論において

は、誤とならず、あゝ勇なる哉、壮なる哉、あゝ便なる哉、利なる哉。次にラグビー部と出かけやしょう。久方ぶりの大勝で早速部員の募集とは、大いに気をあげちょるね、――ラグビー部惜敗、また苦敗、面目一新計らんため、部員募集――と出したなら、あるひはわれも入らんに、大勝軍には用はない、大いにがんばってくれたまへ、籠球部員に、E・S・S、何か名文浮ばぬか、頭のほどこそあやしけれ。（暴言多謝生）

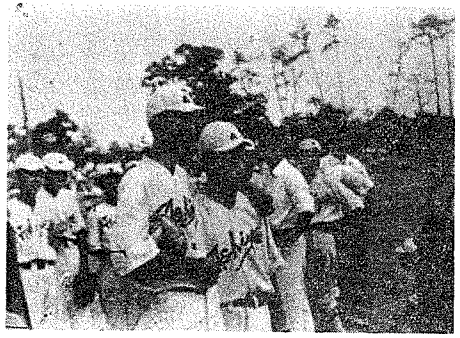
暴言多謝生は、当時四、五号にわたって「芦高新聞」紙上に活躍した、愛すべき匿名短評家（実は三年沢野平）であった。

野球部の活躍

こうした戦後芦中の自由なる教育、生徒の自主性を主体とする校友会活動の成果は、意外にも早く結実した。運動場をもたぬ野球部が、創設八ケ月にして全国中等野球兵庫県大会に優勝したことがその最も大きな現われであった。

左ききという珍しい捕手そして卓抜な統率力をもった橋本修三主将を中心に昨年末より集った同好の者は、岩冠三年の有本義明なる天才的な少年投手をうることによって、そのチームは日毎に上昇していった。しかし歴史と伝統に輝き、強豪の群る兵庫予選に優勝することは万人の夢想だもしなかったところである。

第一回戦に尼中を8―2で破り、灘中との15―12という乱戦勝ちを転機に、とんとん拍子に勝ち進み、あれよあれよという間に、古豪の誉高い甲陽中、関学中を破って優勝してしまった。（この間の事情は座談会の橋本修三君の言葉を参照）昭和二十一年八月一日、夕やみ迫る明石球場原頭に、まだ口ずさんだばかりの芦屋中学校々歌を、声高らかに歌った感激はまことに名状し難いものがあった。戦災後の幾重にも連続する苦難、校舎もなく、まして運動場をもたぬしいたげられた芦中生、彼等の目に溢れる涙、それは現実の苦難が大きいだけに復雑なものがあったろう。芦中生の母校愛、それは日常の学校生活に芽生えるものであるが、分散教授の悲哀を具さになめていた芦中生が、この一つ心に結ばれたことに胚胎し、それが天下の芦中への誇となって更に強い母校愛が培われたといえるであろう。忘れ難いのはこの時一、二回の卒業生が熱心に応援に来て、卒業生、在校生とが全く一つになって応援したことである。



有本、橋本のバッテリー（明石球場にて）

兵庫予選の優勝はまさに奇蹟的なものであった。そして当時の新聞の概評を具さにみれば、ほとんどが現実に勝ったという事実への敬意は表しても、実際はケガ勝ちをしたという風な書きぶりであった。それは野球記者が自己の活躍した時代のなじみ深い学校の出場に対しては同情ある筆致であることによってもうかがえる。しかし戦争中のブランクはそうしたものを一掃してしまった。そこに芦屋中学の進出のチャンスがあったわけである。

甲子園球場が進駐軍使用のため、戦後復活の全国中等野球は西宮球場で開催された。開会式のはなばなしさに檜舞台に出た選手の感激のなおさめきらぬ日の第三戦に、四国の城東中学と対戦して、6―2で惜しくも第一戦に姿を没してしまった。翌朝の新聞はほとんど「芦屋地力に乏し」などとこの結果を予想したかの如くに評していたが、ただ当の朝日新聞にのせた飛田穂州氏の批評はまことに同情に満ち、しかも芦中野球部のその後の発展を予言したかの如きものがあった。

たゆまぬ練習にこそ栄冠―飛田穂州

小型の可愛い両初陣チームは伯仲の技倆をそのまま追ひつ追われつの興味ある試合を展開した。芦屋の投手有本のおのれの体を知って工夫したスローボールも面白く、城東前田のこれまたムラのないピッチングは、ともに少年技手の技巧を十分認むることができた。能勢の強打に一点を先取した城東を追っかけて、同点から一点をリードした芦屋は、四回芦屋の失策に一点を奪われて同点となり、そのまま動かぬ対立となって第一日掉尾の快戦を回一回と進めて行った。惜しいかな、芦屋は八回大野の左翼越強打にホームランをまじへてから、内野守備崩壊して、ついに救うべからざるものとなり、有本の健闘もかいなく遠来城東に名をなさしめた。大会初出場にして兵庫の代表権を獲得した異数の奮闘ぶりは、たとひこの試合を失ったにせよ。賞するに足るだろう。大会の前途は長い。倦まずたゆまぬ練習にこそ栄冠が待っている。

（昭和二十一年八月十六日　大阪朝日新聞）

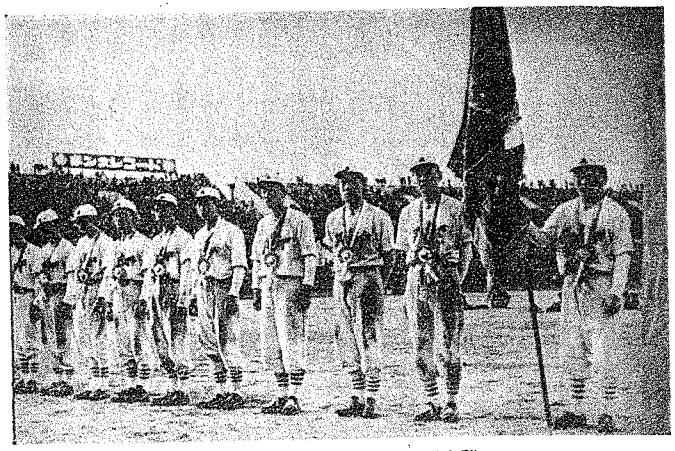
かくて輝かしい本校野球部発展の歴史がはじまるのであるが、これは芦中、芦高そのものの発展と共にあることは注目せねばならぬ。野球の優勝と芦中の蘇生、それは橋本修三君のいみじくも喝破しているところである。

ボールはわれらを救う　　橋本修三

（前略）しかし嵐はその日の沈まぬうちに吹き始めた。我々は四国代表の城東中学と龍攘虎搏の熱戦を展開したが、球運遂にわれを恵まず、血涙をしぼって檜舞台から敗退した。敗戦。それは余りにも悲痛なる現実だった。これで八月十五日に二度敗れたのだ。われわれは発憤した。その血涙を栄冠に変えるべく猛練習が続けられた。その苦杯は県下綜合体育大会によって報いられた。その時にはすでにほとんど全部の生徒がニヒリストではなくなっていた。そして応援旗の下に手を振り帽子をかざし、声の限りに歌い叫び、心からなる声援を送ってくれた。私は嬉しかった。二つのボールは私のみならず芦中生のほとんどを救ったのだ、彼等は情熱をとり返したのだ。（後略）（芦笛創刊号昭和二十三年「芦笛の発刊に寄す」の一節）

それから昭和二十四年の夏の大会までの四年間はいわゆる有本投

手の時代であるが、その間の大きい戦績はクラブ活動の野球部史の記すところである。



昭24.4 選抜野球準優勝

中でも昭和二十四年は最も充実した年で、春の選抜野球には慶応高に九回裏四点を奪って奇勝してから調子がつき、大鉄高、小倉高を一蹴遂に優勝戦にのぞみ、北野高と対戦、延長十回裏一死満塁のチャンスに、石田の放った左飛にサイレン鳴るかにみえた時、二塁の木下不運にもダブられて優勝はならずという場面があり、事実ラジオは全国に一度芦屋高の優勝をつげた程であった。かくて万斛の涙をのんで、夏の大会を期した。この時は優勝候補の貫録をみせて悠々と三試合無失策集中安打の勝ちぶりであったが、伏兵高松一高のために敗れてしまった。

アンケート

一　最も印象深かつたこと
二　芦高の將来に対する期待

高井卓彌（第五回生）

一　われわれにとって芦高生活はすべての出来事が今でも脳裡に焼きつけられて、印象深いものとなっている。校舎の全焼から復興へと進み、その間の変遷は努力の連続であった事は今の私にとっては本当に印象深く、特に学校一丸となって復興に邁進した事の意義は誠に深いものです。強いていえば、校舎全焼の翌日河野教頭先生が水銀気圧計を抱いて町を歩いていらっしゃった姿が印象的です。

二　われわれの芦高での生活が本当に自由奔放であったうちにも、一つの規範内で行動しそれがまたわれわれの手で定められた。すなわち真に価値ある自治会を創設して芦高を守り発展させようと努力したが、これが現在及び将来とも弱体化することのないように切に希望しています。そして学校全体が有機的に連関するよう努めて、在校生諸君が勉学にもスポーツ活動にも天下の芦高の名を愈々高めて下さい。